

研究ノート

『ル・グラン・モーヌ』覚え書

——アラン=フルニエと二重の世界⁽¹⁾

清 家 浩

アラン=フルニエ（本名アンリ=アルバン・フルニエ Henri-Alban Fournier 1886-1914）の『ル・グラン・モーヌ』*Le Grand Meaulnes* が出版された1913年、プルーストの『失われた時を求めて』第一編『スワン家のほうへ』を始め問題作が相次いで発表されたという意味で、文学史上、奇蹟の年と称されるこの年、フルニエは27才であって翌年にはドイツ軍との戦闘で命を落としている。開花以前に散った才能という印象がこの作品を、例えばプルーストやジッドとの比較で、幾分マイナーなものと評価させる理由の一つとなっているのかもしれない。「幻想的な冒険小説 [……] 思春期特有の不安定な魂のおののきを夢と現実の交錯する謎めいた空間の彷徨と、ソローニュ地方のみずみずしい田園の風物のなかに描きだしたこの佳作⁽²⁾』と言われてみれば、自ずと、牧歌的でファンタスティックな小品のイメージが湧いてこようというものである。

が、しかし、このフルニエの自伝的作品は青春をノスタルジックに回顧する作品なのか。そもそも、いまだ旺盛な人生の春を生きている人間が行動をストップさせて生涯をふり返る作品を書くものだろうか。40代のプルーストが「現実には記憶の中にしか存在しえない」という確信のもとに己れの生きたがままの生を再構成しようとする決意には一個の必然が感じとれるが、むしろこれから人生を生きていくべきフルニエが人生の総決算をしようと思いつくには、それ程までに、彼の虚無感は深かったと言わなければならないであろうか。

20才になる直前（1906年9月20日）、友人ビシェ Bichet 宛の手紙で、彼は「最も敵対的かつ最も困難な状況にあって、わが心の奥底から—いまだ不明瞭で、恐らく、

(1) 当小論は1998年度後期広島大学文学部における演習『ル・グラン・モーヌ』の講義ノートを新たな観点を加味してまとめたものである。

(2) 田村毅、塩川徹也編、『フランス文学史』東京大学出版会、1995、P. 266。

かつて生きた生あるいは予感された生から保存された奇妙な印象にしかすぎない——一個の追憶が立ち昇るのを感じることに」以上の喜びはないと語る。「これらのイメージ、死んでいながらわが心の情熱に溶けあって生きてもいる世界が見られかつ感じられるこのイメージのみしかもはや見つめない暇と力を僕が持つ時、その時、恐らく、僕は表現されえないものを表現するに至るだろう。そして、それが僕の世界の詩 *ma poésie du monde* となるだろう」⁽³⁾。ランボー的とも、ネルヴァルのとも、プルースト的とも言えるこの手紙を書いた若者は、この年も翌年も高等師範学校 *Ecole Normale Supérieure* 受験に失敗する。彼のたどるべきコースは、両親にならって教師になる道ではなく、内心のこのイメージの追求を通して世界の意味をさぐることであろう。

が、しかし、このイメージの源泉は何なのか。その究明は何故、また、どのようにして、現実と夢が交錯する空間となって小説化されるのか。それが本論の中心テーマである。

1. 夢 と 現 実

1. 運命の出会い

状況 1905年6月1日キリスト昇天祭 *Ascension*⁽⁴⁾ の木曜日、グラン・パレの絵画展を出た石段の上で、アンリ=アルバン・フルニエは一人の若い女性に出会う。続く6月11日、聖霊降臨祭 *Pentecôte* の日曜日、彼は彼女に再会して言葉をかわす。フルニエの運命を決定的に左右し、探求の方向を定めさせた根源とはわずかこれだけの出会いなのである。

ブルジュの高校でバカロレアを取得したフルニエは、1903年10月、教師になるべく高等師範学校入学をめざして、ソーの「ラカナル高校」の準備学級 *Khâgne* に入学していた。が、もともと海軍士官志望でブレストの高校に入学した彼がラカナルへ来たこと自体、一種、運命的と言えるかもしれない⁽⁵⁾。本来の目的である高等師範入学は果たせなかったが、そこで彼の文学の才能は磨かれ、終生の文学仲間、例えば後に妹イザベルの夫となり、また、N. R. F. の編集長ともなるジャック・リヴ

(3) Alain-Fournier, *Lettres au petit B*, édition revue et augmentée, Fayard, 1986, PP. 35-36 以下 LB. と略す。

(4) *Ascension*. 復活祭から40日目のカトリックの移動祝祭日。次の *Pentecôte* は復活祭後7度目の日曜日。

(5) フルニエの生涯については特に、Zbigniew Naliwajek, *Alain-Fournier romancier, Paradigme*, 1997 を参照した。

イエール Jacques Rivière 等を得るのであり、そもそも、パリへ来ることなしには「グラン・パレでの出会い」もなかった。

ところで、彼が邂逅した至高の女性イヴォンヌ・ド・キエヴルクール Yvonne de Quiévre-court は何をもってここまで彼を魅了したのであろうか。7月、ロンドンからリヴィエールに宛てた手紙では、「僕の頭にはセヌ河と出来事とトゥロンしか浮かばない」⁽⁶⁾（出来事とはイヴォンヌとの出会い、トゥロンは彼女が住む都市を指す）とあるが、英国滞在の軽やかな報告に紛れた瑣末事といった趣きである。10月の手紙も「忘れられない2週間のバカンス旅行」を熱っぽく語って屈託がない。唯、「宿命というか、僕が6時、電車でリュクサンブール駅の前を通過したまさにその時、イヴォンヌが母親と入ってきた。彼女は僕が一番よく似合うと言ったドレス—そして帽子—を身につけていたが、僕は不安を覚えつつ、これは何か意味があるのかと自問したものだ」（1905. 10. 4, I. P. 171）の記述に、意識下のこだわりを感じとるばかりである。つけ加えると、キエヴルクール嬢と出会う前、イヴォンヌといえ、ラカナルの生徒達をソーからパリへ運ぶ列車にブル・ラ・レーヌから乗りこんでくる娘で、フルニエと彼女は親しい仲だった。

6月の出会いがもたらしたものの、彼女の容貌も含めてその具体的な様相、それを、われわれはまだ体験が新しいこの時点で知ることができない。文学に耽溺しつつも受験勉強を第一にする20才に満たない若者の記憶に焼きついた女性のおもかげは、むしろ、時と共に輪郭とその意味あいをはっきりさせてくる。

反芻 活動の季節が去って静かにひきこもる冬。夏に出会った女性の映像が薄れてくることに焦りを覚えたフルニエはリヴィエールに訴える。「美しいイメージが失われてゆく大なる悲しみについて君に語りたい。僕はいつ彼女と再会できるだろう。毎夜の僕の記憶の努力。ロンドンのポッティチェルリの聖母の目。その他に、微笑を少し、口元を少し、髪を少し、どうやって、どうやって想い出すのか。あの素晴らしいそしてもの悲しい、ほとんど現実の夢。通り過ぎる美しい女達の列。ある者は彼女と同じ帽子をかぶり、ある者は彼女同様体をかしげ、他の者は彼女のワンピースの《明かるい茶》、他の者は彼女の目の青、そして、誰一人として、誰一人として彼女ではない…」（1906. 1. 22, I. PP. 259-260）同じ哀惜は2月17日の手紙にもくり返される。フルニエは消え去ろうとする面影を名画の女性に必死に結びつけようとする。ベアタ・ベアトリックスの横顔、ポッティチェルリのマドンナの青

(6) Jacques Rivière Alain-Fournier, *Correspondance 1904-1914, Nouvelle édition revue et complétée par Alain Rivière et Pierre de Gaulmyn*, 2 volumes, Gallimard, 1991, I. P. 69. 以下、引用は巻数および頁数を日付けと共に本文中に示す。

い目、ダンテ・ガブリエーレの近寄りがたさ、ワッツの『生』etc. (I. P. 287)

記憶の中で薄れるイメージは現実に彼女に再会することで確固として明瞭なものになるはずである。再会的手段を持たないフルニエにとっては、彼女も又自分同様この出会いに運命を感じたなら、他に再会的手段がない以上、去年の夏と同じ日、同じ時刻、同じ場所に再びやってくるに違いないと確信して、その場に行く以外方法はない。しかし、この年のキリスト昇天祭5月23日木曜日、彼女は現われなかった。思い出の場所を彷徨する彼の探索は徒労に終る。「僕は再び始まろうとしている新しい生の観念に慣れなければならない [……]、僕に残されたこの低劣な生をはいずりまわることには忍従しなければならない」(I. P. 413)

新しい生、即ち、出会い以前の元の生にフルニエは帰ってゆくのか。7月16日、高等師範の入学試験に落ちた彼は、バカンス先から、合格した級友ビシエに述べている。「資格も知識も愛も頭脳も乏しい僕は、ソローニュの小道をたどりつつ、燐[化学] やスペイン語をつめこんでいる。—僕の頭はほとんど落ち着きをとりもどした。」(1906. 8. 28, LB. P. 17) そして、9月には再度受験のためにパリの名門校「ルイ・ル・グラン高校」の高等師範受験準備クラスに転校する。勉強よりも読書に打ち込んだことは事実であるが再び受験生活にもどったようではある。しかし、秋11月。ふと春を思わず生暖かい風が通りを吹きぬける時、どうしようもなくあの熱情がまいもどってくる。「非常な金髪のほっそりした信じられないほど美しい乙女」のイメージの旋回。「僕を駆りたてるこの愛、もうあと1年、どうやってこの愛を眠りこませておけるのか。」(1906. 11. 19, I. P. 574)

書簡の膨大さに比べれば彼女に関する記述は微々たるものだが、しかし、そのイメージは間欠泉のように執拗に吹きあげてくる。1907年1月26日の手紙。「今この時、僕は彼女の顔立ちをほとんど忘れ去っている。僕にはその表情と美しさが残るのみだ。[……] 遠く不可能な大いなる愛を求めていた僕にあの愛がやってきた。そして、今、僕は苦しんでいる。[……] 毎日、僕は彼女の美に説明を見出す。そして、そのたびに、僕は一個の観念を表明する。そのすべてが真実なのだ。」(I. P. 642)

7月、筆記試験に合格したものの口頭試験で不可となって高等師範入学を果たせない彼は、致命的な事実を知る。イヴォンヌ・ド・キエヴルクールはその冬結婚して今はヴェルサイユに住んでいる、というのだ(1907. 7. 25, II. P. 81)。受験はくり返すことができるが、愛の成就是不可能となった。今までは、いつかどこかで再会を果たせば、二人が結ばれる可能性はあった。そうなるはずであった。⁽⁷⁾ 20才の若者

(7) 彼女と営む家庭生活の夢。I. P. 287, Ô Taille Mince! 以下、及び、LB. P. 111 参照。

は潔くあきらめるか。彼に新しい世界の展望は開けるか。ところが、翌年の聖霊降臨祭、彼は相変わらず3年前の出会いを語っている（「思い出してくれ、あれは聖霊降臨祭、次の日曜日。ああ、すでに大粒の雨で和らげられてはいたが、ひどい暑さの中だった。一人の丈高い乙女がやってきたのは。」1908. 6. 4, II. P. 197）そうなのだ。それまで幾分抽象的で内実を欠いた彼女のイメージがより説明的となりふくらみを持ってくるのは、彼女との愛が不可能となって以後のことである。あたかも、現実では会って復元できないが故に、記憶の中で何があっても失われたイメージを完成させようとするかのように。1908年9月6日付けビシェ宛の手紙に見られるような、彼女が言った言葉、声の抑揚、顔立ち、仕草、服装、そして彼女の魂のありようまでがこれほど克明に述べられたことはかつてなかった。（LB. PP. 109-112）

2. 引き裂かれた世界

分裂 1905年の出会いなしでも、アラン=フルニエの世界はすでに、高等師範学校を経て教師をみざす現実のコースと読書・詩作を経て作家になる芸術のコースとの容易に両立させがたい二つの道に分岐していた、とは言いうる。はたせるかな、現に前者の道は放棄さざるをえなかった。それに加えて、1907年10月には、彼の意志によるのではない苦役、最終的に戦死につながる兵士の道が始まる。しかし、現実が真に質的に異なる二つの圏に分裂するのはキエヴルケール嬢の結婚を契機としてである。1907年7月25日、ボルドーからリヴィエールに宛てた絵ハガキは、彼女の結婚の事実を伝えた後に、《Déchirement, déchirements sans fin》と続けている（II. P. 81）。déchirement とは胸が張りさけるような悲痛な感情だが、文字通りには引き裂くあるいは引き裂かれることである。世界は引き裂かれ交通不能の二つの圏に分かたれた。

以前も、至高の女性のイメージは現実の生の上位にあった。⁽⁸⁾ 一方、現実の生は《basse vie》（下位の低劣な生）とされていたのである（1906. 5. 27, I. P. 413）。高みへはよじ登るなり跳躍するなりすればよいが、通路は閉ざされたのだ。「僕の道はもはやあの魂の土地へと通じていない。[……] 彼女が僕の心に引き起こした甘美で苦い僕の生のすべてでもあった《想像の世界》を僕は失った。僕は大地の真中にたった一人だ。」（1907. 8. 21, II. P. 104）1ヶ月後の手紙である。

単に、彼女のいる世界と彼女のいない世界という分裂ではない。この世界から突

(8) 「彼女に追いついた時、僕は一体どのような高みに達していたのか」《A quelle hauteur étais-je donc arrivé lorsque je l' ai atteinte?》（1907. 1. 26, I. P. 642）

如彼女の痕跡が消えたのである。この事態は、当然、フルニエを、一方で彼女なしの世界に生きる決心へ、他方で彼女を別の生の住人とする一種の神秘主義へ導くはずである。

先の手紙で、地上でたった一人であることを嘆いた後、確かに、彼は決心している。「打ち勝たねばならない、意欲しなければならぬ、想像しなければならぬ、生きなければならぬ」(II. P. 104)と。この年開始される兵役と創作活動はその証と言えるかもしれない。⁽⁹⁾地上の女性との交渉も又。2年の兵役が終ろうとする1909年9月5日の手紙には、その間、フルニエが関係を持った女性達の長いリストがある(II. P. 329 Sqg)。そして、この地上的愛で結ばれた女性の代表として、後の作品のヴァランチヌ Valentine となるべきジャンヌ・ブリュノー Jeanne Bruneau が現われる。ジャンヌはどんな女性だったか。知りあって3ヶ月、フルニエは、最初の彼女との別れ話の状況を友人ビシェ(1910. 9. 11)とリヴィエール(1910. 9. 20)に語っている。後者への手紙によれば、「彼女には人を夢中にさせるどこか子供っぽいと同時に悲劇的な何かがあり[……]非常に美しくずばぬけて頭が良かった。彼女はほとんどあらゆる最良の美点を持っていた。」(II. P. 402)イヴォンヌに劣らぬ魅力を具えた女性として描かれながら、フルニエは、しかし、「僕は彼女に対して一度でも大なる愛を持ったとは思わない。激しい愛着は持ったけれども」(Ibid.)と言い切っている。何人もの愛人を持ち、彼女のために自殺した男までもがいたジャンヌにはひとつのものが欠けていた。その故にフルニエが彼女を迫害し残酷に扱い、2年の間、結局、心からの理解と融和を許さなかったその欠けたるもの、フルニエはそれを「ピュルテ *pureté*」と呼ぶ。この無垢性が、唯一の女性以外地上のいかなる女性も持ちえないものであって、なおかつ、フルニエがそれを求め続けるというのであれば、それはすなわち、彼女なしの世界=現世に彼は住むことができないということではないか。

ピュルテ 彼女と別れた理由を再び語る8日後の手紙で彼は言う。「僕は愛人 *une maîtresse* なんて問題にもしない。僕は愛 *l'amour* を求める。めまいのような、犠牲のような、すべてのしめくくりのような愛。その後にはもはや何も存在しないもの。地上のすみずみに火を放ったあげくの出発。[ところが]彼女[ジャンヌ]はできるだけ長い間共に暮らせる誰かを求めていた。」(1910. 9. 28, II. P. 413)このような文面を読むと、フルニエの「ピュルテ」が貞潔とか純粹無垢といったもの

(9) 彼がヴァンセーヌの第23機甲連隊で兵役に就くのは1907年10月2日。アラン=フルニエのペンネームを初めて使用するのが、同年12月25日『ラ・グランド・ルヴュ』誌掲載の『女性の肉体』*Le Corps de la femme* である。Naliwajek, 前掲書 P. 20。

にとどまらず、何か地上的なもの一切の拒否を意味するのではないかと思われてくる。ところで、彼がこの「ピュルテ」について語りだすのは、すでに触れた1908年6月4日の聖霊降臨祭からである。「僕はもはや彼女の顔、彼女の声、あの大なる悲しみについて語りたくはない。あのピュルテについて語りたい。」II. P. 197) 前年、イヴォンヌは結婚している。彼女との出会いの3周年の記念の日、この祝日に彼女は失われている。この事実を痛切に実感する時この観念は生まれてくる。そして、やはり、すでに見た、同年9月ビシエ宛ての手紙。「《優美 *élégante*》と言うだけでは十分でない。ピュルテが常に彼女にふさわしい言葉だ。」(LB. P. 110) この世では結ばれえないと想い定めた時、この愛の不可能性が彼女を「ピュルテ」で包みこんだのである。

翌年、出会いから4年目のキリスト昇天祭、思う存分苦しむため部屋にこもったフルニエは、ルルドの聖母に奇跡を求めなかったことを悔んでいる。「たった一度彼女に再会し、あの、あれほどピュールな顔を見、一瞬でいい、私の苦悩する頭をあの金髪に押しあてること。(この後に、ルルドのベルナデットの前に現われた聖母が彼女に言った言葉が添えられて)『私はあなたにこの世の幸福を約束しません。ただ、あの世での幸福を。』こうして、あれほどのピュルテはこの世のものではありえないのだ。」(1909. 5. 20, II. P. 298) こんなピュルテを地上の女の誰が持てるであろうか。女性にピュルテを求める以上、フルニエの愛は不幸な結果に終らざるをえないのである。「恐らくこの世で僕ほど苦しんでいる人間はいまい。決然とした様子をしていても、それは、言葉と行動だけのことだ。僕の心底の思考は堂々めぐりの地獄そのものだ。」(1910. 9. 11, LB. P. 213) フルニエのイヴォンヌに対するこれだけの執着には、至高の女性に会ったという確信とともに、彼女も自分を理解したという確信もまた与っている。フルニエから見れば、これは自らの一方的な愛ではなかった。「[もはや彼女はいない。しかし、]これは共有された *partagé* 大なる愛だった。」(1908. 6. 4, II. P. 197) 愛しあっているながらこの世で結ばれない愛。この出口のない愛にどのような解決が可能であろうか。「より一層ピュルテを増し、世界と現実の重要性をさらに減じることが僕を癒やしてくれるだろう。」⁽¹²⁾(1909. 5. 20, II. P. 299) これは宗教的逃げ道を言っているのか。確かに、前のページで、彼はこうも言っていた。「もし僕が全身全霊あげてカトリックに入れるならば、この瞬間からすぐにカトリックだ。」(Ibid. P. 298) あるいは、死の誘惑を言っているのか。6月18日の手紙。「[来たるべき僕の臨終] ついに魂の解放と出発を告知するあ

(12) 《(Peut-être) plus de pureté, moins d'importance attaché au monde et à la réalité, m'en guérirait.》

のむごたらしいあえぎ。その時やっと、僕がその住人であった奇妙な失われた楽園が呼びだされる。[……]僕は、渴望された国へのあの脱出の鍵を求めている。——そして、それは、恐らく、結局のところ、死なのだ。」(II. P. 311)

しかし、フルニエは、現実に対する敗北にはかならないような宗教にも死にも向かわなかった。彼は世界のほうを自己の欲望に屈服させようとする。「わが芸術の完成、わが愛への接吻、わが苦悩への慰め、わが喜びの高揚」としての作品、「超自然な出来事の地上的表現」であって「あらゆる人間的問かけへの無限の返答」となるべき聖なる作品を語る時(1910. 4. 4, II. P. 357)、彼は、『ル・グラン・モーヌ』への道に踏み出している。アラン=フルニエは作品創造へと出発したのである。

II. 現実と作品

1. 構造の問題

枠組 自己の経験を友人に伝える書簡そのものがすでに作品であった。⁽¹³⁾ 体験した出来事、それに付随する私の感情。しかし、これら堆積する事実はいかにロマネスクな内容であっても、それ自体、決して小説ではない。増殖し拡散していく悲嘆と哀惜をいかにして完璧な表現世界に閉じこめるか。

今までたどった彼の体験から、描くべき世界ははっきりしている。1905年の夏とその他すべての時間、出会いの場所とその他すべての場所、唯一の存在とその他すべての存在、イメージと現実、天上と地上、聖なるものと俗なるもの、不可能と可能。基本の要素はこんなものだ。単なる過去の再現ではなく、全く質の異なる空間からなる世界の再構築が問題となるのである。

かつて、友人ビシェが恋人との別離の後で、フルニエに、「追憶による世界の創造」を語ったことがあった。「もし僕の記憶がなければ、目の前の世界があるだけで、かつて存在した世界は決してないだろう。並置される一連の現在があるのみ。[……] もはや存在しないものにかつて存在した存在を与えるのは僕だ。僕によって生きられたが故に僕が思い出すハーモニーと今あるハーモニーを溶けあわせて、僕はメロディーを創り出す…」(1908. 9. 9, LB. P. 118) ここには、確かに、経験を作品化する意味が美しく語られてはいる。フルニエの場合にもあてはまるであろう。が、いかにして、の実践的部分が抜けおちている。本来詩人であるフルニエにとっ

(13) フルニエはリヴィエールとの往復書簡が一個の書物たるべきことを十分意識していた。「1905年から今日まで、これらは一冊の大部な書物となるだろう。[……] それは後世に対して十分準備できている。」(1910. 9. 19, II. P. 400)

て、瞬間の感動をそのまま歌いあげることと違って、それら詩的な瞬間をつなぎあわせて一個の小説に仕立てあげる作業は容易なことではないだろう。

ところで、作品の細部がまとまった形で初めて語られるのは、1910年4月4日付けのリヴィエール宛書簡においてである (II. P. 357)。主人公の名前はモーヌ Meaulnes, 作品の核となる「3日間の不可解な欠席」もすでに言及されている。タイトルは『婚礼の日 Le Jour des Noces』, 但し、決定したわけではなく単なる章のタイトルになる可能性もある。着手された章を見れば、サン・タガット Saint-Agathe への場所の設定, 少年達の冒険, 野遊び, 結婚, という風にはほぼ小説の筋立てができあがっていることがうかがえる。全体のプランやノートもあって、約 $\frac{1}{10}$ 程を書き上げた計算である。うまくいけば、1週間で仕事は大幅に進む見通しも語っている。が、しかし、精力的に書き続けるからといって仕事が順調に運ぶわけではない。「空想的な想像の部分 *partie imaginaire fantastique*」と「ただ単に人間的な部分 *partie simplement humaine*」を同時に書き進めながら、ビシエには、自分の最初の小説が、想像によって書かれた空想的な前者に還元される見通しを語ったかと思うと (1910. 8. 22, LB. P. 209), リヴィエールには、回想からなる人間的な部分即ち後者の方はすこぶる快調, 前者の方はあきらめねばならないと正反対のことを言っている (1910. 8. 24, II. P. 389)。次の手紙もまた、フルニエのがむしゃらな作業と難渋ぶりを伝えている。「僕は恐ろしく苦勞している。あらゆるものと闘っている。毎日、時間を選ばず、1ページ、4ページと書いていって、それから1日かけて、書いた各部を調整し、配分していく。完成できるものかどうかわからない。」 (1910. 8. 28, II. P. 391)。部分はできてもそれを支える全体の枠ができないのか、書き連ねられるものが最初の枠組みにおさまらなくなったのか、彼は、材料は整っているのに組み立て不能の状態に陥っている。「書物の体裁を具えた最初の書物を書くためには、無知な男がたった一人で家を建てるために必要とする以上の作業と勇気を費やさねばならない。」 (Ibid.) と同じ手紙でフルニエ自身告白している。無限に滑走をくり返すばかりで彼はついに離陸できないのか。作品は一個の小説として日の目を見ることはないのか。この生みの苦しみ、行き詰まり状態からフルニエはほどなくして脱出する。

ダマスへの道 「僕は結局すべてから解放された。以来、方式は正しいと信じなければならぬ。」 (1910. 9. 11, LB. P. 216) この突然の方向転換を、ビシエにもリ

(14) 草稿中の「下書き1」には、第1部からヒロイン (アンヌ=マリ Anne-Marie, 後のイヴォンヌ) の死までの小説のプランが一頁にまとめられている。Claude Herzfeld, *Le Grand Meaulnes d'Alain-Fournier*, 1981, P. 137.

ヴィエールにも、フルニエは「ダマスへの道を発見した。J'ai trouvé mon chemin de Damas.」と伝えている。キリスト教徒を迫害していたパウロがダマスカスへの途上で神の姿を見、キリスト教に入ったことからくるこの表現は、まさしく、フルニエの状況にぴったりである。というのも、作品に取りかかって以来成果をあげることなく継続してきた人工的に *artificiellement* 作品を構築する手法、その一切を彼は投げ捨て、その結果、進むべき方向を発見するのであるから (1910. 9. 20, II. P. 406)。それは、しかし、素朴といえる発見である。即ち、「単純に、直接的に、簡潔であって肉感的な *voluptueux* 小さなパラグラフによって、普段の手紙の一通のように書く」ということであって、彼は、「それまでがんじがらめになっていたすべての抽象化、すべての哲学を捨てさる。」(Ibid.) しかも、そこには、奇蹟的と言うか、抽象的で極度に捨象された一個の観念のみではなく、彼のすべてが含まれるのである。ここに、フルニエは知性によって生み出されるものより、むしろ感覚の優位を説くプルースト的立場に接近したと言いうる。実際、一週間後、リヴィエールの文章（『より昔の、忘れ去られた以上の、われわれ自身にも未知のもの』）を引用しつつ、フルニエは、この象徴主義の痕跡が自分の人生同様、現在進行中の作品にも大きな比重を占めていると語り、それを、「通りの角、パラグラフの終りに消えはててゆく感動、過去のどの地点にも置くことができないほど遠い回想」とプルースト的響きで敷衍しているのである (1910. 9. 28, II. P. 412)。相入れない二つの世界からなる作品空間に私の過去の時間が交差する。1905年夏以後の世界に私の過去の大量の時間を流し込むことが可能になったのである。「僕のすべて *tout moi*」(Ibid.) とはそういうことだ。

さて、ダマスへの道が感覚的なものの導入で作品を再始動させるとすれば、この発見と完全に時期の重なるジャンヌ・ブリュノーとの決別も又無視するわけにはいかない。先の9月28日の手紙によると、フルニエは3つの章を清書しているが、この3章ともがジャンヌに関するものであって、かつ、そこに込められた感動が「他の存在 *une autre présence*」から来ることを明示している。現在進行している事件（ジャンヌ）と小説世界（イヴォンヌ）の混交、関連づけの可能性が示されたのである。現実におけるフルニエとジャンヌの別れが、モーヌとヴァランチヌの別れの描写に投影されるだけではない。小説の最後で、モーヌの行動の秘密を明かすものとして、構成上も重要な役割を担うのである。ここに至って、フルニエが書く最初の小説の性格がますます明確になってくる。「わかるだろう。僕の書物、それはキーツ Keats の物語だ。即ち、『われわれのうちの幾人かは前世でアンチゴネに出会った。そして、人間的ないかなる愛も彼らを満足させえない。』⁽¹⁵⁾ただ、ここ

[この作品]では、現世そのものにおいてアンチゴーネとの出会いはあった。[……]最後のパートで主人公はアンチゴーネを再び見出す。そこには一個の自己放棄があるだろう。それが『狭き門 La Porte étroite』の自己放棄以上に美しいものであることを僕は願う。」(Ibid. P. 412)

かくして、次に、フルニエがイヴォンヌ・ド・キエヴルクールと出会う1905年6月と「グラン・パレ」、即ち、アンチゴーネに出会った前世にあたるもの、それを、フルニエの過去から現在までの時間と空間のどこかに置き換えることが最も重要なこととなる。現実の時空と接点を持たない場所を現実内部に作り出せれば、他のすべては自ずと動き出していくだろう。残るはそこを動く人物とそれを語る人物を設定することである。しっかりした枠組ができればあわてることはない。作品は入念な推敲の成果を待つだけで良いであろう。¹⁶⁾1910年秋の「ダマスへの道」の発見から1913年春の作品完成まで先は長い。

2. 人物の設定

モーヌとイヴォンヌ 主人公モーヌは、地上にあって唯一天上へ足を踏みこんだ人間、即ち、前世でアンチゴーネに出会った男として設定されなければならない。彼は、先ず、その他の仲間とは、外観は同じ髪を短く刈りこんで半外套を着た田舎の少年であっても、根本的に異なる人種である。では、どのように異なるのか。「第I部のグラン・モーヌ、その傍らではすべてが可能な男 *un gonze auprès de qui tout est possible* [……] 奴と共に道や通りに出る時、人はすべてが可能になるのを感じる。そして、恐らく、次の瞬間、通りを曲がると、彼はほほえんで、君が夢でしか決して見たことのない美しい失われた土地 *Beau Domaine Perdu* を君に指さすだろう」(1912. 11. 2, LB. P. 274)。いくら過誤と彷徨を重ねるとしても、モーヌはすべてを實現してしまう。彼にとってすべては可能なのだ。確かにこれがモーヌの基本的性格である。スレル *Seurel* やフランツ *Frantz* はどれほどこのモーヌの力を感じ頼りにしていたことか。が、彼は、そもそも、人間ではない。あの冬の朝、モーヌは教室に「若々しい神秘的で傲慢な神 *un jeune dieu mystérieux et insolent*」(1910. 4. 4, II. P. 357)として帰ってくる。しかも、樂園がもはや存在しえ

(15) 自分の小説のテーマとして、この引用は10月4日、ビシェ宛にも送られる。

(16) 本文の確定までの過程の一端は、Alain-Fournier, *Le Grand Meaulnes, Introduction, notes et choix de variantes* par Claude Herzfeld, Nizet, 1983 の注によって知ることができる。Les «rencontres textuelles» que nous relevons – on pourrait en signaler combien d'autres! – font apparaître que le roman qui nous intéresse est l'aboutissement d'une lente élaboration... (同書 P.255)

ないことを知っていて、従って、幸福をあきらめてもいる。「彼はこの世にあって、今やそこを去っていこうとしている人のようだ」とも構想されている。フルニエははっきり言っている。「グラン・モーヌは一個の残酷な天使であって人間ではない」(Ibid. P. 359)。どこにいても去っていく男。サン・タガットのフランソワから、ラ・フェルテ・ダンジヨンの母親から、ヴァランチヌから、イヴォンヌからさえ。天上から地上に来た天使は地上の掟には従わないのである。

至高の女性=アンチゴーネと結ばれるためには、彼女がこの世で結婚し子供までもうけた以上、もう一度あの世に帰る以外に道はない。1905年の出会いに端を発する問いかけの答えとしてモーヌはそのように設定されなければならないのである。草稿の一つにはこう読める。「僕は結婚したのだ、こう言っていていいと思うが、前世において。それは僕につきまとう思い出だ。」⁽¹⁷⁾ 決定稿のモーヌが未知の領域に近づくにつれて覚えた「説明できない感動」、「異様な満足」、「完璧で陶醉させる安らぎ」、「目的は達せられた、後はもはや幸福だけを待たばよいという確信」⁽¹⁸⁾は彼が本来帰るべき場所に達したことを意味している。その城館で彼にまわりつく子供は彼の子供であり、ピアノを弾く女性は彼の妻だ。茶のコート *manteau marron* を肩にはおっている以上、それは、「グラン・パレ」のイヴォンヌであるに違いない(PP. 66-67)。この彼がアンチゴーネと結ばれた前世、それは楽園と呼びかえても良い。天上を求めて地上をさまよう天使とは、失われた楽園を求めてソローニュとパリをさまようモーヌであり、至高の女性への不可能な愛に懊悩するフルニエである。

このモーヌの彷徨を最も劇的にするべく人物が配置されるが、当然、楽園=サブロニエールにはイヴォンヌ・ド・ガレが置かれる。そしてモーヌがこの「神秘の土地」で初めて彼女に会う時、彼女は、フルニエが現実に行ったイヴォンヌそのままに描かれる。作品とビシエへの手紙(1908. 9. 6)の比較。「白いパラソル」《*La jeune fille s' y promènerait sous une ombrelle blanche*》(P. 70)と《*C' était une demoiselle, sous une ombrelle blanche*》(LB. P. 110), 「黒い靴とか細いくるぶし」《*Elle avait des souliers noirs très découverts. Ses chevilles étaient si fines qu'elles pliaient par instants et qu' on craignait de les voir se briser.*》(P. 71)と《*Quand nous quittâmes (souliers noirs à nœuds de rubans très découverts; chevilles si fines qu' on craignait toujours de les voir plier sous son corps)*》(LB. P. 111), 交わされる言葉《*Nous sommes deux enfants; nous avons fait une folie*》

(17) *Le Grand Meaulnes* par Claude Herzfeld 前掲書 P. 316

(18) Alain- Fournier, *Le Grand Meaulnes*, Livre de poche, 1998, P. 53 以下, 作品からの引用は講義で使用したこの版に依って頁数のみを本文中に記す。

(P. 73) と《*Nous sommes des enfants, nous avons fait une folie*》(LB. P. 110) 等々、等々。現実の至高の女性はそのま作品のヒロインとなった。そして、第3部で、彼女は、田舎のよろず屋へみすぼらしい馬で買物に来る地上の女性となる。城館の栄華は失われ、神秘の土地はヴィユー＝ナンサー Vieux-Nansay の村の一部をなすサブロニエールと呼ばれる単に一個の地所となりさがった。結婚し母親となるキエヴルクール嬢の変転をなぞったかのように。再会したモーヌが彼女とついに結婚するのは、この世でアンチゴーネに再会した喜びからではなく、あまりに地上的な落魄ぶりへの哀れみからだ。すべてが可能なモーヌも彼女を再び天上の高みへもどすことはできない。婚礼の翌日に出発したモーヌからは見捨てられたまま「あの土と死の味 *ce goût de terre et de mort*」を残して死ぬのは彼女の当然の宿命である。

ヴァランチーヌとフランツ ヴァランチーヌの元となった現実の女性ジャンヌ・ブリュノーが、「ピュルテ」を除いて、イヴォンヌと遜色のない魅力の持ち主であったことはすでにみた。そして、彼女とモーヌは一見同じ種属の人間に見える。共にソローニュ地方——一方はちっぽけな田舎ラ・フェルテ・ダンジヨン、他方は都市(ブルジュ)とはいえ貧民街——から出て、無名の間人——一方は放浪者、他方はモディスト(お針子)——として、サブロニエール即ち楽園の住人——一方はイヴォンヌ、他方はフランツ——の出現を待ちながら、ガレ家のパリの館の前に希望もなく際限もなくたたずんでいる。しかし、ヴァランチーヌはモーヌのようにあの神秘の領地を自分の足で踏みしめたことがあったであろうか。否である。彼女は城館の御曹子と結婚するためその土地の手前まで来て突然逃亡したのだ。現実の土地とは陸続きになっていないこの楽園への参入を請われながら彼女は拒絶した。即ち、彼女は地上にとどまることを選んだ女である。イヴォンヌがアンチゴーネの位置から地上的死へ下降の線を描いたとすれば、逆に、ヴァランチーヌは最低の場所(PP. 219-220)からサブロニエールの貴婦人へ上昇線を描くことができたであろう。が天上の住人にはなれない、というのがヴァランチーヌの運命であって、人物の配置の上から最重要の点である。言いかえれば、それが「ピュルテ」の欠如の作品化なのである。あたかも結婚したかのようなモーヌと彼女(《*Ma femme, Valentine, ma femme...*》P. 214)は絶対に結ばれない。グラン・モーヌは「一個の残酷な天使」であって地上の掟には従わない。錯覚とわかれば、彼は、平然と、女を現実の破滅の方へ押しやるのである。

さて、もう一人、モーヌによく似た人物はイヴォンヌの弟フランツである。彼もモーヌ同様、地の果てまでも愛を求めてさまよう存在である。サブロニエールの楽

園の外、即ち、地上に見出した女性ヴァランチーナを失い再び見出すまでが彼の物語である。婚礼の直前に彼女が突然消え去る時、彼はピストル自殺を図る。生きる目的がなくなったからである。「僕はすべてを捨てた。僕にはもはや父も姉も家も愛もない。」(P. 102) モーヌが「神秘の土地」への回帰を願う時、フランツは逆に、そこに背を向け(《Je ne saurais pas y retourner》P. 102) ボヘミアンとして、ジプシーの曲技団の一員として生きることしかできない。しかし、それは彼自身が決断して選びとった生き方であったろうか。そうではない。彼を救った男(彼の婚礼に雇われた道化師ガナッシュ)に単に寄生しているだけなのだ。彼は自力で目的に達することができない。かくして、モーヌに対する彼の恨み。「モーヌはどうしても僕を構ってくれないのか。どうして僕が呼びかける時に答えてくれないのか。[……]でも、彼だけが僕を救うことができるのだ。彼だけが僕の探す足跡を見つけることができるのだ……。彼は自分の愛にめぐりあった。なぜ、今度は、僕のことを考えてくれないのだ。」(P. 176) 彼は完全に他者に依存した身勝手な人間である。最終的に、彼は、探し求めた女性ヴァランチーナと、モーヌもイヴォンヌも過去の輝きも一切をなくした、即ち、楽園でなくなったサブロニエールに家庭を持つ。楽園に背を向けたフランツとヴァランチーナが手に入れたのは、結局、地上の幸福である。二人は、かくして、モーヌとイヴォンヌのカップルの陰画なのだ。フランツは天上への道をめざさなかったモーヌである。と同時に、「学生それとも恐らく海軍志願者」(P. 64) と言われる以上、苦悩を知る以前のアラン=フルニエ自身でもある。

二人はまたモーヌと天上の間に置かれた障害でもあった。フランツはモーヌにパリの住所を教えることによって探求の方向を楽園でなく煉獄の方へ大きく逸らせた。ヴァランチーナは、勿論、モーヌの無垢性を損なわせた。のみならず、二人は、結婚したモーヌとイヴォンヌを1日にして引き裂いた張本人でもある。モーヌは彼らのためにイヴォンヌを置きざりにしたのだから。

フランソワ・スレル 書簡に示された1905年6月とその後の転変を「前世でアンチゴネに出会った地上の男」の物語として提示するにはもう一つの置き換えが必要であるが、それを少年時代に設定することは二重の意味で正しい。前世と現世、天上と地上の二極は、構造的に、失われた過去(幼少期の楽園)と苦役の現在に重ねることが可能であるからであり、又、量的な観点からは、記述の中に、作者は己れの過去の貴重な回想をふんだんに取り入れることができるからである。

では、物語りを語るのは誰か。友人リヴィエールに初めてモーヌと作品の進捗状況を語った手紙の中にはまだ迷いが見られる(「それは主人公グラン・モーヌか、

スレルか、アンヌ・デ・シャン [後のイヴォンヌ] か、はたまた僕であるか」1910. 4. 4, II. P. 357)。しかし、それは、発端から終末までを見届け、当事者であって第3者の立場に立てる人物でなければならない。そのような人物として、フランソワ・スレルは作者の回想を己れの回想として語り、突然の闖入者モーヌの冒険を共有するのである。冒頭を見てみよう。「189…年11月のある日曜日に彼はわが家にやってきた。」(P. 13), が、モーヌの話は始まらない。「私は《わが家》と言い続けるが、その家はもう私達のものではないのだ。私達はその土地を離れてまもなく15年。そこへ帰ることは確実に決してないだろう。」(Ibid.) そうして、教員である両親との新しい土地 (小説の舞台サン・タガット) での生活が回顧される。その後、この平穏な生活をかき乱しにやってきた一人の人物の回想がいよいよ語られ始めるのである。

ところで、モーヌが欠席して神秘の土地をさまよった3日間の出来事をスレルは語ることができるのか。モーヌが現実の土地から突然次元の違う神秘の場所へ紛れこんだと同様、この3日間の冒険は、サン・タガットの教室に流れる時間とは異質な時として語られる。「すべてが終った今日, [……] 私は彼の奇妙な冒険を語ることができる」と前置きして、叙述は完全な3人称となる。11月にやってきて翌年3月にはスレルのもとを去ったモーヌのその後の足取りは、ある時は手紙で、最後にはトランクに残されたメモ帳を引用する形で語られる。各パートには、このようにして、語り手によるのではない語りが必ず挿入される (第1部—Aventure 以下, 第2部—Les trois lettres de Meaulnes, 第3部—Le secret)。言いかえれば、モーヌはスレルにあらゆる秘密を委ねる。ところが、スレルはモーヌの外面と内面を読者に提示するだけが役目ではない。彼はモーヌがどうしても巡り会えなかったイヴォンヌにヴィユー＝ナンセーの方から接近して、神秘が月並みに陥る過程の証人ともなる。冒険ではなく定められたコースを進んで田舎教師となった典型的な地上の人フランソワ・スレルこそが、地上の女として死んだイヴォンヌの骸を抱くにふさわしい (P. 203)。

3. 叙述の手法

連結 最初の一行を書く時すでに最後の行が見えていて、終りから書き始めることも、又、好きな時にどの部分を書くこともできる、ポーの言う良き作家のお手本のようにフルニエは書く。ストーリーはむしろ単純である。モーヌの到来から神秘の空間の発見までのクレッシェンド (第1部), 発見から断念までのデクレッシェンド (第2部), この二つのパートを反復して地上の虚無を証明する解決編 (第3

部)。具体性に貫かれた短いパラグラフからなる細分された章だて。が、それぞれ自由に書かれ練り上げられた断片を重ねて小説に仕立てるための細工としては各部分を貫く横糸が必要となる。単に時間的経過をたどる平面性に、時を越えた本質を浮かびあがらせる立体性が。

かくして、モチーフの反復、混交が行われる。例えば、未知の土地に紛れこんだモーヌの前に現われた少年はどうか。彼はピストルをしのばせ姿をくらます (P. 76)。早朝、馬車でこの土地を去るモーヌの耳に聞こえる轟音 (P. 81)。第2部でモーヌのライバルとなるボヘミヤン、その告白 (P. 102)、正体の発見 (P. 113)。頭に巻いた包帯状の布が自殺未遂者フランツのライトモチーフだが、他方、彼こそが、冬の田舎の子供達の日常と今は復帰不可能な神秘の土地を結ぶ紐帯なのだ。又、彼がモーヌに、城館の娘が復活祭と聖霊降臨祭を過ごすパリの住所を教えたことが (P. 103)、第2部を閉じさせる。なぜなら、復活祭が近づいた3月、モーヌはイヴォンヌとの再会を求めて、物語の舞台サン・タガットからとびだしてパリに上るのであるから。それだけではない。「ウー、ウー Hou-Hou」の奇妙な呼びかけの合図の約束は第3部で実行され (P. 177)、又しても、モーヌの今度は作品を終結させる出発につながってゆくのである。

あるいは、モワネル叔母という奇妙な存在がある。彼女もあの祝宴に招待されていたことが明かされる第3部第3章におかれたエピソードによって (P. 153)、モーヌのそばで婚約者のうわさ話をしていた二人の老婆の「可哀そうなモワネル *Ma pauvre Moinelle*」 (P. 64) と呼ばれた一方が読者の記憶にクローズアップされる。逃げ出したヴァランチヌを偶然助けて家に置いたのも彼女だった。狂女の妄想のように語られる事実が、モーヌとヴァランチヌのいきさつを述べる第2部最後の手紙そして第3部最後に置かれたノートに、謎解きの注釈めいた光をあてるのである。

対照 各部の連結は、当然、人物の置かれた状況の差によって深い変化の相を一方で示す。例えば、限りなく端正で鋭い鷲鼻のひげは無く豊かな髪をきちんと分けた貴公子、サブロニエールの祝宴の主催者フランツ (P. 76) は、教室をかき乱す転校生あるいは曲技団の一員のボヘミヤンとして第2部に登場した後、第3部では、埃と土にまみれ、無精ひげと伸び放題の髪をした打ちひしがれた人物として登場する (P. 179)。かつては誇り高く若さと力にあふれていた貴公子が、今は人生の敗残者としてみじめに震え助けを求めている。「美しい恋をいくつか経験した美貌のフランツは生きるために盗みを働くことさえ始めたに違いない [……]。あれほどの誇らしさが遂に到達したのがこの姿だ。」 (P. 180) ファンタスティックな詩情にあ

ふれていながら作品に悲痛な気分が漂うのはこのコントラストによる。それは人物のみに限らない。サブロニエールの地所は、第1部及び第2部の、モーヌが訪れ再び帰ることのできなかった神秘の空間から、第3部の、悪童連の行動範囲内においてフランソワはじめ村人が自由に交通できる変哲のない空間に変わっていく。前半と後半の野遊びの雰囲気も同様の作用を受ける。幸福な気分を満たされた最初の集いから2回目に何か残されたものがあるだろうか。モーヌの問いかけにイヴォンヌは「すべてはなくなりました」と答えるばかり (P. 169)。幸福をとり返すために催されたシェールのほとりの野遊び。馬車で来る招待客、モーヌ、イヴォンヌ、子供達のさざめき、お膳立てはかつてと同じだ。「すべてはわれわれが幸福であるよう完全に準備されてるようにみえた。そして、われわれはあれほどまでに幸福ではなかった。」 (P. 163)

高みにあったものはすべて下降し、輝いていたものは消沈し、時の経過の中で、すべてが風化し頹落してゆく。過去と現在の対照が示すのはそのことである。ただ、冒険と神秘に無縁であったフランソワは変わらない。教室で学んでいた立場が教壇から教える立場になっただけである。そして、楽園を求め続けるモーヌは、相変わらず地上のこの法則に従わない例外者のままだ。

レアリテ 抽象性を排除して具体性をめざす、彼の言葉で言い換えれば、*voluptueux* (官能的) な文体を生み出すには、しかし、描写の細部を支えるレアリテが必要ではないか。確かに、モーヌの運命を左右する2人の女性は現実のままに描写されている。すでに見たように、ビシェとリヴィエールに宛てた手紙で語られるイヴォンヌとアンヌ、そして、作品中のイヴォンヌとヴァランチヌは同じ語彙、共通の特徴をもって描かれるのであるから。それを可能にする「黒い小さな手帳」の存在もあつた。⁽¹⁹⁾ 現在進行中の愛の修羅場と書き留められたイメージ、共に生の素材が使えたのである。

が、それ以前、作品の背景をなす少年期はどうか。この点では、物語が終わった時点でこの冒険を回顧的に眺める語り手が、エピソードの一つ一つが現実起こったのだと印象づける介入を行う。その端的な手法は季節と天候へのこだわりである。出来事を伝えるだけでは満足せず、「失われた時」を取り返すブルースト的手段と言えようか、時の目印を示しつつフルニエは、ある過去の瞬間の全体性を回復させようと努力する。かくして、「ある夜、2月15日頃だったか [……] その日は非常に荒れた1日だったが」 (P. 41), 「[彼は] 春の1日に入りこんだようだった。

(19) 出会いから3年後、以前にも増して克明にイヴォンヌを喚起するビシェ宛の手紙の一節（「かつて僕が控えたところによると」）に対する注参照。1908. 9. 6, LB. P. 111

それは確かにこの冬で最も暖かい朝だった」(P. 69), 「この数日来, 3月が来て風がやさしくなったのを」(P. 107), 「僕の記憶に残る最も晴れやかな春の朝」(P. 116) 等々。季節がパラグラフのリズムを刻むのである。子供達が争って水を求める夏の一節を最後に引用する。「シェールの乾いた岸辺の, 地上のすべての冷気が閉じこめられたこの場所 [……], 今でもなお, どこで発せられようと, 泉の言葉を聞くだけで, 長きにわたって, 僕が思い浮かべるのはこの泉なのだ。」(P. 140)

ま と め

アラン=フルニエはその短い生涯を唯一の女性に捧げたのではない。むしろ、眉をひそめさせる女性関係に事欠かない⁽²⁰⁾。一方で、無類に美しいこの青春小説がある。が、相方の根は1905年の運命的な出会いにある。そして、唯一の愛が成就不可能になったことにすべての出発点があった。彼が以後経験するすべての愛は、不可能なこの愛の唯一性を証明することのみ存在理由があるのであり、なぜこのような事態に陥ったのかという問いかけへの答と自己正当化のために、作品は書かれざるをえない。愛しているながらレギーネ・オルセンとの婚約を破棄したキルケゴールが、作品において、己れに科ありや否やを問いかけたのにも似て、むしろ、それと対をなすかのように、フルニエは、なぜ幸福を拒絶されねばならないかを問い続ける。

不可能性からの脱出はありえない以上、彼にはこの不可能性の構造を示す以外に道はない。それは、異なる秩序に支配される二つの世界として示される。即ち、ピュルテが支配する天上あるいは前世と、死に支配される地上あるいは現世。この二つの世界をフルニエは少年期のソローニュに置く。それは、「僕の芸術と文学におけるクレド、即ち少年期。それを、いかなる幼稚さもなしに神秘に触れる深さをもって表現すること」⁽²¹⁾という1906年の宣言を実行に移すことでもあった。

前世の記憶を持つ唯一の人物、地上をさまよう天使がモーヌである。「スレル、君はサン・タガットでの僕の奇妙な冒険が僕にとって何を意味していたかを知っている。それは僕の生きる理由、希望を抱く理由だった。この希望が失われた時僕はどうすればよかったのだ。どうやって他人のように生きれたろう。僕は、すべてが終わった、失われた領地がもはや探す甲斐もないとわかった時、それでも、かの地パリで生きようと試みた。しかし、ひとたび樂園に踏み入った者が、その後で、どうやって常人の生活に甘んじえようか。万人の幸福であるものが僕にはつまらないも

(20) 山崎庸一郎著『愛のファンタズム』(踏靑社, 1988)がこの問題に詳しい。

(21) 《Mon credo en art et en littérature: l'enfance. Arriver à la rendre sans aucune puérilité, avec sa profondeur qui touche les mystères.》1906年8月22日, リヴィエール宛書簡。

のにみえた。そして、本気で、決然と、人並に生きようとある日決心した時、その日、僕は長期にわたる悔恨を手にしたのだ。」(P. 159)

ヴァランチヌと結ばれることでモーヌは二重の罪を犯した。地上の女と通じ、そして、保護すべきフランツから婚約者を奪ったという点で。モーヌが、イヴォンヌとの結婚の翌朝すぐ放浪に再出発しなければならない理由はそこにあった。彼には二人を結婚させサブロニエールに住ませる義務が課せられた。してみれば、これは、自分の罪をあがなって天に帰る天使の物語でもある。「あの神秘的冒険以前の狩好きの田舎者モーヌだったら望んだに違いない伴侶」(P. 213)とされるヴァランチヌと結ばれるフランツは、従って、1905年の経験をしなかったフルニエである。そして、彼ら二人の生を見届け、回想の中にそれを物語化するフランソワ・スレルは、無論、作家アラン=フルニエである。

不可能な愛の構造を解明するフルニエの努力は、また、失われた幼少期の楽園の回復をもたらした。苦悩から出発する作品におけるこれほどの詩情と艶やかさ、悲痛な分裂を包みこむ静謐感はその証明である。新たな冒険—それとも天上への帰還—に出発する旅支度の腕にモーヌがしっかりと抱えたイヴォンヌが残した忘れ形見の幼な子は、まるで、作品『ル・グラン・モーヌ』を表わしているようである。

(1999年3月)